百々裏話（62）

おもて　あきら

〔三番叟の問答について〕

翁の舞がすんで翁大夫が退場し、三番叟が壮快な揉之段を舞い終えた後に、黒式尉の面を着た三番叟と面箱持の間で、短い問答がかわされる。鈴之段への導入部というべきもので、基本的な演出である初日の翁の場合の詞章を、『狂言集成』所収の鷺流本文によって掲出すれば次の如くである。（文字等一部改変）

三番　あらめでたやな。物に心得たるアドの大夫殿に見参申さう。

面箱　ちやうど参って候。

三番　誰がお立ちにて候ぞ。

面箱　アドと仰せ候ほどに、それがし随分物に心得たると存じ、おアドの為に罷り立ちて候。

三番　ほう。

面箱　今日の御祝儀を千秋万歳とめでたきやうに舞うておりそい、色の黒い尉殿。アドと申す所に早々とのお立ち祝着に存ずる。今日の御祈禱をこの色の黒い尉が千秋万歳とめでたきやうに舞ひ納めうずるは、何よりもって安う候。まづアドの大夫殿は、もとの座敷へおもおもとお直りそい。

面箱　それがしの座敷に直らうずるは、尉殿の舞より安う候。まづおん舞ひ候へ。

三番　いやお直り候へ。

面箱　いやおん舞ひ候へ。

三番　ただお直り候へ。

面箱　さあらば鈴を参らせう。（鈴を渡す）

三番　あらやうがましや候。（以下鈴の段となる）

野村万蔵氏著『狂言の道』所収の和泉流の本文、『謡曲大観』所収の大蔵流の本文（冒頭部に誤脱あり）と比較すると、狂言方の流派によって微細な相違は多いが、大綱には変りがないと言ってよい。

この三番叟の問答は、現在の舞台上の演技からはほとんどオカシミの感じられぬ場合が多いが、文句を熟読してみると、狂言方の分担にふさわしくオカシミの盛られた問答であることが理解できるはずである。物に心得たるアドとして面箱持がすぐに名乗り出ることも、それを受けて〝ヘエーオマエサンガネ〟とばかりに「ほう」と大げさに三番叟が発する感動詞も、狂言の世界のものと言えよう。後半の「先に舞え」「先に直れ」というやりとりも、三番叟がみずから言うように「様がましき」（大げさな）もので、オカシミを狙ってこの趣向に相違あるまい。オモ・アドが能のシテ・ワキに対応する狂言方の用語であり、一般にも通用していた言葉である事実を考慮すると、アドに対して「おもおもとお直りそい」と言うのも、言葉のシャレを意識したものと解される。

三番叟の問答が祝言性のみならずオカシミをも備えていることは、初日以外の文句を参照することによって、より容易に理解できよう。翁の詞章が、数日間にわたる勧進猿楽の演出に淵源すると思われる初日・二日目・三日目・四日目などの幾つかの異なる形を持ち、他にも十二月往来・父尉延命冠者・法会之式などの特殊形態を持つのと同様に、三番叟の問答にも、初日・二日目・三日目、及び「田歌」と呼ばれる特殊な形とが伝えられている。まず二日目の問答は、和泉流では「烏帽子の祝儀」と小書を附す由であるが、初日と同様にアドの大夫を呼び出した後に、翁大夫の着る立烏帽子や嘯子方の着る折烏帽子の名を問い出し、「四方に四万の倉を立烏帽子、その中にどうど折烏帽子」と祝言のシャレを言い、将棋の駒形のお前の烏帽子は何と言うかと逆に問われて、「天より七珍万宝がふり烏帽子候よ」と、「古り」に「降り」を掛けた祝言のシャレで結んで、然る後に鈴を受け取る形である。三日目の問答は、和泉流では「子宝」

と小書を附す由で、呼び出したアドに自分が十人の子を持つ子徳人であることを誇り、その十人の子を一声で呼べるよう「おとよ・けさよ・だんだら・いなごに・たつ松・いる松・かいつく・ひつつく・ひうち袋」と名づけたという、どこがめでたいのかもよくわからぬふざけた内容である。「田歌」は初日・二日・三日の区別なく用いられる形らしいが、アドの名を田歌節で呼んで見たいと、「ヤドノヤ〳〵……」(ヤドはアドの訛りか)と節にかかって呼ぶのに対し、アドモ「ナジョトヨ〳〵」と節で応じ、挙句が「面箱何事ぞ。三番なんぼう良き天気には候はぬか」と終って鈴を受け取るたわいもない内容である。言葉のシャレの明白な二日目の形、ふざけた命名を柱とする三日目の形、田植歌の節を採り入れた「田歌」の形、ともに明らかに狂言の世界のものである。それらと同類の、前掲の初日之式の問答に、同じく狂言的なオカシミを狙う趣向が盛られていることは、ほとんど確実であると言ってよいであろう。

それでいながら、現在の三番叟の問答にはとんどオカシミが感じられないのは、翁猿楽の全体に必要以上に厳粛さが要求され、演ずる狂言方があまりおかしくならないよう留意しているせいかと思われる。そうした傾向は世阿弥の時代にすでに初まっていたらしく、『申楽談儀』の第17条に、

三番申楽、をかしにはすまじきことなり。

近年人を笑はする、あるまじきこと也。

とある記事がそのことを推測せしめる。近年になって人を笑わせる三番猿楽が初まったように言ってはいるが、悪しき事を近年生じたものとし、昔をよき時代とするのは伝統を尊重する立場の人の好んで用いる論法であり、そのままには受けとりにくい発言である。むしろ、人を笑わせる演じ方の方が三番猿楽としては本来的なもので、それを世阿弥時代から望ましからぬ傾向として規制し、式三番の全体を厳粛に演ずる方向へと変えていったのではないだろうか。

翁猿楽が、本来は今ほど厳粛に演じられたものではなく、古くはのどやかな諧謔の精神に満ちたものであったろうことについては、野上豊一郎博士に「翁と喜劇精神」なる名論文がある(同氏著『能—研究と発見』所収)。しかし博士は、三番叟の問答については、「その対話にも能以前の民間演戯を思はせる素樸な調子が残ってゐて、考証の資料となるべきものである」とされながらも、翁猿楽の演戯の主要部ではないとの理由から、そこを採り上げず、主として翁面にのみ本来の喜劇的精神が残っていることを強調された。それが三老翁時代の翁猿楽当時からのものであったか否か疑わしく、世阿弥以後の式三番に於いても演技の主要部でなかったことは確かであろうが、三番叟の問答に残るオカシミは、翁猿楽にかつて濃厚であった喜劇的精神の名残として、もっと注目されて然るべきではなかろうか。現存の文句がもし世阿弥時代からのものであるならば、それはまた、狂言の古い形態を探る上でも有力な資料となり得るはずである。翁が専ら四日之式で演じられる関係から、三番叟の問答も初日之式(四日目の形でもある)のみが上演されているのが現状であるが、たまには「田歌」の形でも演じて、三番叟に残るオカシミについて、観客の認識を新たにしてほしいものである。

なお、昨年十一月、岐阜県能郷の猿楽を現地で一見する機会を得た。そこでの翁は、四日之式の文句を単調に唱える程度の単純なものであったが、三番叟と千歳(面箱)の問答の末は、鈴を受け取った三番叟が「あら様がましや」と千歳を楽屋へ(橋がかりは無い)投げ飛ばす形であった。それが原形のままとは言えないにしても、そうした乱暴な所作も許されるのが古い演じ方であったことが想像されて、甚だ愉快であった。兵庫県賀茂川の翁といい能郷の翁と言い、郷土芸能の翁には意外に古色が残っているようである。

(34・1・6)